

「地域共生社会」の実現に向けた コミュニティソーシャルワーク実践理論に関する研究 —コミュニティソーシャルワーカーによる 「社会的孤立」支援の実践から—

加藤 昭宏 (2021 年度修了)

1 本研究の背景と目的

「制度の狭間」や「社会的つながりが弱い人」などの「社会的孤立」支援に向けて、コミュニティソーシャルワーカー（以下、CSW）の役割やソーシャルワーク機能への期待が高まっている（日本学術会議社会学委員会社会福祉学分会編，2018；厚生労働省第9回社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会編，2017）。本研究では、これら CSW の役割等への期待の高まりや、そのための専門人材養成・専門性強化の必要性、そしてソーシャルワークが十分に機能していないという指摘（中村，2020 ほか）等を背景として、「地域共生社会」の実現に向けた CSW の支援展開可能性を探り、「社会的孤立」事例への支援を可能とするコミュニティソーシャルワーク実践理論について提唱することを目的とする。

2 各章の要約

第1章「コミュニティソーシャルワークの理論化をめぐる」では、コミュニティソーシャルワークの定義や機能について概観し、本研究の射程を確認した。様々な分野、課題への期待から、CSW の配置が全国へ広がって

きた一方で、その役割には地域間格差が生じており、また求められる CSW 像と実際との乖離による混乱も指摘される。ここでは特に、CSW の機能や定義は「曖昧」（松端，2018）とされ、「方法論が未確立」（梅澤ら，2017）という問題が指摘されていることを確認した。

加えて、コミュニティソーシャルワーク実践を展開できるシステムの構築も不可欠であり、「個別支援と地域へのアプローチの統合が可能となるシステム」の重要性も指摘されている（菱沼，2008）。これを受け本研究では、まずコミュニティソーシャルワーク実践を展開できるシステム構築の手法について検討していくこととした。

第2章「コミュニティソーシャルワークシステム構築に向けた手法」では、地域福祉活動計画の策定プロセスに焦点をあて、社会福祉協議会全体としてどのようにコミュニティソーシャルワーク機能を展開していくことが出来るかという「基盤的体制」のあり方について考察した。具体的には、地域福祉計画・地域福祉活動計画等をめぐる議論を確認し、長久手市社会福祉協議会（以下、長久手市社協）のプロジェクトチームによる計画策定プロセスから実践的検討を行った。

これらのことから、「計画策定デザイン」として、次の3つの要素が必要であることが示唆された。①「地域福祉推進システム」の構成要素を計画の理念・基本目標と一致させること、②プロジェクトチームという媒体を通じ、まずは事業ごとで「地域福祉推進システム」の構築を志向していくこと、③社協職員の意識のパラダイムシフトを起こすこと。このような策定プロセスを経ることで「コミュニティソーシャルワークを展開できるシステム構築」につながると結論づけた。

次に、CSWによる「社会的孤立」支援におけるコミュニティソーシャルワーク方法論・実践理論について考察した。コミュニティソーシャルワークを展開する上では、地域住民との連携が重要である。すなわち、「制度の狭間」の課題を抱える人々をどのような枠組みで捉え支援するかを住民に対してわかりやすく提供できる理論的枠組みが必要である。このことから**第3章「ソーシャルワーク理論モデルとしての二次障害への着目」**では、まず「制度の狭間」の課題を抱える人々を「どのような枠組みで捉えるか」について検討した。具体的には、「制度の狭間」が「空間、家族・地域・職場等のさまざまな『つながり』から排除された」（熊田，2015）「関係性」の課題であることを確認し、「関係性」についての概念整理を行った。次に、「制度の狭間」の課題の一つとして「ひきこもり」から、その背景を探った。そしてその背景に「二次障害」や「併存精神障害」があると考えられることから、これらについての理論的検討を行い、長久手市社協 CSW における「社会的孤立」事例から実践的検討を行った。

以上のことから、「社会的孤立」事例における「二次障害の生活史モデル」として次のように整理した。「制度の狭間」の課題を抱える人々の背景には、①もともとの発達障害などの「生きづらさ」があるだけでなく、②それら生きづらさに対する家族や友人・知人、地域住民など周りの人々の無理解・無配慮による不適切な対応が繰り返され、「内的世界における生育歴上の二次障害」として、自己評価・自尊感情の低下、歪んだ認知や病的な判断等の対人関係の歪みや適応上の問題を引き起こしている。③さらに統合失調症、鬱病、双極性障害、不安障害、強迫性障害など「併存精神障害」が合併し、深刻化することで、④ひきこもり、「ゴミ屋敷」など「制度の狭間」の課題を抱えるに至る。⑤そして「制度の狭間」の課題

を抱えることによる家族関係の悪化、「近隣トラブル」等が起き、現在（外的世界）においても他者との「関係性」における二次障害が生じ、「社会的孤立」となっている。

以上、CSWによる支援の「焦点」として「どのような枠組みで捉えるか」についての検討を行った。それにより、「制度の狭間」を「関係性」の課題として捉え、その背景にある発達障害などの生きづらさによる生育歴上の二次障害や、現在における地域住民など他者との「関係性」における二次障害に対して支援を展開していく重要性を確認した。

第4章「コミュニティソーシャルワーカーによる個別支援と地域支援の統合の可能性」では、前章の議論を引継ぎ、「二次障害による社会的孤立」に対して“どのような枠組みで支援するか”という CSW の支援展開可能性を探った。ここでは、まず「社会モデル」を理論的視座として「地域共生社会」について理論的検討を行った。そして、長久手市社協の実践から実践的検討を行った。

これらのことから、CSW の支援の「枠組み」について次のことを明らかにした。個別支援と地域支援の「統合」によって、とりわけ外的世界における現在の二次障害への有効なアプローチにつながり、個別支援は深化する。また「社会的孤立」や「社会的排除」に陥れられている人々は、大多数の人々（地域社会）から、無自覚的に、そもそも考慮もされず困難を生じさせられており、これら差別や抑圧は潜在化している。この無自覚的な社会意識に個人が気付くことが「我が事」への第一歩であり、個別支援と地域支援を統合した CSW の支援展開に地域住民を巻き込むことによって、その気付きを促すことができる。このプロセスを経ることで「我が事」となり、「地域共生社会」の実現に向かうと考えられる。

また二次障害概念は、「社会モデル」の考え方と同様の構造を持っている。すなわち本人の病気や障害（インペアメント）そのものが問題なのではなく、家族や地域住民など他者との強弱関係を伴う相互作用によって生じる「生きづらさ」と、その連続上にある「関係性のなかで生じる問題」が CSW の支援の重要な焦点の一つであることを確認した。

第5章「『クライン派対象関係論』を援用したコミュニティソーシャルワーク実践理論の展開可能性」では、これまでの議論を引継ぎ、二次障害など「関係性のなかで

生じる問題」による「社会的孤立」事例に対し、CSWがどのようにアプローチできるかという実践理論について検討した。ここでは、現行の理論・方法論の一つであるストレンクス・モデルとの「相互補完的」な位置付けとして、他者や社会との交互作用によって生じる「被害感」に着目し、その支援のあり方について検討した。次に、「被害感」が他者との「関係性」の中で生じるものであり、また本人の「内的世界」に起因することから、「クライン派対象関係論」の諸概念 (Klein, 1946; Bion, 1959) について概観し、コミュニティソーシャルワーク理論モデル・アプローチへの援用を試みた。そして、ひきこもり、「近隣トラブル」の2事例から実践的検討を行った。

これらの分析から、本章では次のことを明らかにした。コミュニティソーシャルワーク理論に「クライン派対象関係論」を援用することで、「社会的孤立」状態にある対象者の心的理解の一助となる。それによって「被害感」の軽減を図ることができ、「本人主体」の支援が可能となる等、個別支援を深化させることができる。加えてその支援展開によって、本人（対象者）や地域住民を支援の「受け手」から「支え手」へと変化を促すことができる（コンテナ／コンテインド）等、「地域共生社会」の実現に向かうための実践的な理論・方法論として一定の展開可能性が示唆された。

終章『「地域共生社会」の実現に向けたスプリッティング・モデルおよびコンテイング・アプローチの素描』では、前章までの考察の要約と整理を行い、その上で、改めてソーシャルワーク理論モデル・アプローチとしてさらに精緻化をした。ここでは、二次障害など「関係性のなかで生じる問題」による「社会的孤立」をとりまく状況について、「クライン派対象関係論」の概念、およびジェネラリスト・ソーシャルワークの基盤理論とされるエコロジカル・パースペクティブにおける「生態学的視座」を援用し解釈すると、相似構造を持つ2つのスプリッティング（「分裂」）を見出すことができた。すなわち①【対象者の内的世界におけるスプリッティング】と②【地域におけるスプリッティング】である。

①は、マイクロレベルにおける分裂である。他者との交互作用の結果、「関係性のなかで生じる問題」によって「妄想分裂ポジション」状態となり、「破壊・解体不安」に対する原初的防衛機制として自身の「攻撃・破壊衝動」は「分

裂」されていた。そして母親や近隣住民など他者や地域に投影され、「被害感」に代表される「迫害不安」として表出し、それらからの「迫害」に対する「問題行動」として現象化していた。そのため他者や社会とつながれなかったり、支援につながらなかったりしていた。

②は、メゾレベルにおける分裂である。対象者を取り巻くコミュニティを一つの生態としてみると、対象者の言動が「理解できない」が故に、「異物」としてコミュニティから「分裂」されていた。すなわち、「地域社会からの排除」（分裂）による「社会的孤立」状態であった。そして、対象者の「問題行動」として現象化していた。

本研究では、これらの概念的枠組みを「スプリッティング・モデル」として提起した。スプリッティング・モデルにおける対象を捉える視座は、次のとおりである。

①マイクロレベルにおける対象（対象者）を捉える視座として、「内的世界における生育歴上の二次障害」、および「外的世界における現在の二次障害」の2つを、支援における重要な焦点の一つであるとみる。すなわち対象者を、「本人の生活史の中で、他者との交互作用の結果、二次障害等の問題を抱え（させられ）た人」と捉える。

また②メゾレベルにおける対象（コミュニティ）を捉える視座として、その背景に「無自覚的な差別・抑圧等の社会意識」を確認する。すなわち「無自覚、かつ強弱関係を伴う交互作用によって、コミュニティという一生態から、理解できないが故に『異物』として排除されるというプロセス（社会的排除）が生じている」と捉え、個別支援と地域支援を一体的に展開していく。

以上、スプリッティング・モデルを基盤として対象①対象者、および②コミュニティ）を捉え、「個人の内的世界からみた他者との関係性への支援」、および「内的世界への理解の促しを通じた関係性への支援」を展開することによって個別支援が深化する可能性が見出された。加えて、「クライン派対象関係論」を援用したCSWの個別支援と地域支援の統合により、対象者や地域住民など「当事者」を支援の「受け手」から「支え手」（コンテナ）へと変化を促すことができる等、地域福祉のさらなる推進にもつながることを確認した。

これらのことに加えて、相似構造を持つ2つのスプリッティング状況に対して、コンテナとしての当事者（対象者・地域住民）と共に支援を展開させることで、

マイクロレベル・メゾレベル双方において同時一体的に「社会的孤立」支援が可能となり、相乗的にコンテナを増やしていくことが可能になることも考えられる。

以上、スプリッティング・モデルを基盤として「社会的孤立」を捉え、また実践理論として「クライン派対象関係論」を援用しながら、個別支援と地域支援を「統合」し「コンテナと共に」支援を展開するアプローチを「コンテニング・アプローチ」として提唱した。

3 本研究の到達点と今後の課題

本研究の到達点について、以下の3点に集約できる。第1に、本研究では、社会モデルを理論的視座として「地域共生社会」について考察し、二次障害など「関係性のなかで生じる問題」をCSWの支援における重要な焦点の一つとして同定した。そして、これら「関係性のなかで生じる問題」に対する支援枠組みとして、個別支援と地域支援の統合の意義を明確化した。

第2に、「関係性のなかで生じる問題」の一つとして「被害感」に着目し、「クライン派対象関係論」を援用したコミュニティソーシャルワーク理論モデル・アプローチについて考察した。これにより、「社会的孤立」支援におけるストレンクス・モデルとの相互補完的な実践理論として、「個人の内的世界からみた他者との関係性への支援」、および「内的世界への理解の促しを通じた関係性への支援」という2つのアプローチの展開可能性を示した。これらは、生活モデルの視座を深化ならしめ、ジェネラリスト・ソーシャルワークにおける支援展開可能性を拡大させた。

第3に、二次障害など「関係性のなかで生じる問題」による「社会的孤立」をとりまく状況について、相似構造を持つ2つのスプリッティングを見出すことができた（スプリッティング・モデル）。これら2つのスプリッティング状況に対して、「クライン派対象関係論」を援用し、CSWが「個人の内的世界からみた他者との関係性への支援」、および「内的世界への理解の促しを通じた関係性への支援」を一体的に展開することで、マイクロレベル・メゾレベル双方において同時一体的に「社会的孤立」支援が可能となり、相乗的にコンテナを増やしていくことが可能となる（コンテニング・アプローチ）。これらの実践をCSWが展開し、また積み重ねていくことで、

「地域共生社会」の実現へと向かうことが示唆された。

今後の課題としては、コミュニティソーシャルワーク実践理論の確立に向けたさらなる検討、コミュニティソーシャルワーク機能を拡大させる具体的な方法論の検討、重層的支援体制整備事業の実施計画策定プロセスへの援用可能性の検討、の3点の必要性を挙げる。

今後、CSWに求められる「相談支援機能」はさらに大きなものとなるだろう。ソーシャルワーク機能の重要性が高まる中、スプリッティング・モデル、コンテニング・アプローチの概念をさらに精緻化、体系化し、ソーシャルワーカー養成における教育プログラムや現任CSWの研修プログラムへ反映させることで、CSWの専門性強化につながり、「社会的孤立」支援が進み、「地域共生社会」の実現へと向かうと考える。これらのことについて、引き続き現場実践、および研究の積み重ねから検討を深めていきたい。

主な引用文献

- Bion, Wilfred, 1959, Attacks on linking, *Int. J. Psychoanal.* 40 : 308-315.
- 菱沼幹男 (2008) 「コミュニティソーシャルワークを展開するスキルと専門職養成」『文京学院大学人間学部研究紀要』10 (1) : 83-98.
- Klein, Melanie, 1946, Notes on some schizoid mechanisms, *International Journal of Psycho-Analysis*, 27, 99-110.
- 厚生労働省第9回社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会編 (2017) 「ソーシャルワークに対する期待について」.
- 熊田博喜 (2015) 『『制度の狭間』を支援するシステムとコミュニティソーシャルワーカーの機能』『ソーシャルワーク研究』41 (1) : 58-67.
- 松端克文 (2018) 『地域の見方を変えると福祉実践が変わる——コミュニティ変革の処方箋——』ミネルヴァ書房.
- 中村和彦 (2020) 「ソーシャルワーク実践理論の整備に向けたスケッチー実践モデル・アプローチ・支援スキルの現在—」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』(57) : 163-181.
- 日本学術会議社会学委員会社会福祉学分会編 (2018) 『提言 社会的つながりが弱い人への支援のあり方について —社会福祉学の視点から—』.
- 梅澤稔・藤田哲也・松本昌弘ほか (2017) 「社会福祉協議会における支援困難ケースへの対応の記録化・分析方法に関する研究：記録と分析による可視化の意義およびツール開発について」『福祉社会開発研究』(9) : 33-44.